

# QOL・自己決定・楽観主義

「生存学×医療の哲学×生命倫理学  
安楽死を巡る学説の展望と課題」

2010年10月2日

京都女子大学現代社会学部

江口聡

# 道徳思考のレベル

- ヘア『道徳的に考えること』道徳思考には二つのレベルがある。
- 直観的レベル
  - 日常的な道徳思考のレベル
  - 直観的・感情的な判断のレベル
  - 比較的単純なルールに状況があてはまるかどうか
  - 「嘘をつくな」「他人を傷つけるな」etc.
  - 日常生活ではこういうルールにしたがっていただいたというまくいく

# 直観的レベル

- 多くは教育や学習の結果
- 文化や時代によって異なる部分も多い
- 感情との強い結びつき(必要でもある)

# 直観レベルだけでは うまくいかない場合がある

- 人々の直観が食い違う場合
- しかしルールどうしが衝突してしまうケースがある
- まったく新しい状況。どういうルールを適用すればよいかわからない(ex. 人工呼吸器の開発→脳死の発生)
- 正当化が必要

# 批判的レベル

- 合理的・理性的な思考のレベル
- 「合理的」をあんまり強い意味にとってはだめ
- 十分な情報をもとに論理的に混乱せずに考える
- 直観レベルの原則に正当化を提供
- ルールどうしが衝突する場合にどちらが優先するか
- 新しい状況にたいしてどういう直観レベルのルールを立てておけばよいか、われわれはどういう直観をもつべきか

# 批判的レベル

- 治療停止や安楽死はこの批判的レベルで考察される必要がある
- われわれが現にもっている直観と食い違うかも
- 直観的思考をもちこんではいけない
- さまざまな関連する情報を十分に考慮に入れる
- ひとびとの感情や直観的思考も考慮すべき情報である
- Ex. あまりにも人々の感情に反するルールや制度を人々に受けいれるよう要求することはできないかも

# 生命の価値

- 内在的に価値がある／他の価値のための手段として価値がある
- 生命に内在的な価値があるか？
- なぜ人間の生命は特別に重要？
- 私の視点から／他人の視点から

# 私の視点からの価値

- 私の生命は私にとって価値がある
- なんで？ わたしが楽しんだり、価値ある活動を行なったりするために必要だから
- 私の意識がなくなってしまうと私の生は私にとって価値がなくなってしまう。
- 私にとって苦痛だけの生は、(他の条件が同じなら)価値がない。
- なんにしてもQOLを考えないわけにはいかない

# 他人の視点から

- 私に意識がなければ、(おそらく)私の生物学的な生はその時点での私にとっては価値がないだろう。
- しかし、「あの人が生きていることが私にとって価値がある」は重要。ある人の生には他人の視点からの価値もある。
- しかし他人が私の生に感じる価値は、私が私の生に感じる価値よりは弱い？

# QOL

- マイナスのQOLはあるか？ --- 極端なケースではありそう
- あまりにもマイナスな場合には治療停止や積極的安楽死さえ許容されるかもしれない
- しかし緩和ケアがずいぶん進んだのであんまり積極的安楽死が必要なケースはほとんどないだろう

# 二重帰結の理論

- 哲学的に興味深い議論。
- 70年代から中絶と安楽死の両方の文脈でかなり議論されて、二重帰結説の立場をとるのはかなり困難というのが倫理学者の間での主流。(cf. クーゼ『生命の神聖性批判』)
- 差し控えと中断、通常治療と特別な治療、意図と予見などはあまり有意義な区別ではない。
- → 鎮静と(積極的／消極的)の道徳的区別はあんまりはっきりしない

# 意図

- 「意図」が重要だと主張する論者（ex. 清水『医療現場に臨む哲学II』）
- 思考実験。安楽死を行なおうとしている医師が「苦痛の緩和」をその言い訳的手段として選択したとする。その医者は催眠術をかけてもらい、患者の死ではなく苦痛の緩和こそが目的だと思いこむことに成功する → 行為の正邪は意図によって変わるか？
- → おそらくノー。

# 行為の評価と人格の評価

- 行為やルールの評価と人格の評価とを混同するべきではない。
- 苦痛の緩和よりも死を目標とする医師はよい医師ではない。悪い(邪悪な?)ひとも。
- しかし行為やルールの結果が同じであればその評価は結果にもとづいて行なわれるべき。

# 自己決定

- カントの場合は「人格(ひと)として尊重」→ そのひとの「自律を尊重」することと解釈される。
  - 思想史的・哲学的にはあんまりうまくいかん

# ミルの自己決定擁護

- J. S. ミルの場合は社会的効用のため
  - 本人が本人の生活の最善の判断者(自分に一番関心があるのは自分であり、一番多くの情報をもっているのも自分だから)
  - 自分で選択・決定しないと各種の(知的)能力が伸びない
  - さまざまな生活の実験が人類の進歩に役立つ
- 自己決定権は直観レベルの概念(そもそも「権利」のほとんどは直観レベルの概念)

# 自己決定の問題

- しかし、カントやミルが考えていたほどわれわれは理性的ではない。
- 「ミルは、欲求が比較的安定しており、外的な影響によって人為的に刺激されることの少ない中年男性の心理を、通常の間人間が持っているものと考えがちであった」(H.L.A.ハート)

# ミルの自己決定の制限

- 「だれかが、確実に危険だとされている橋を渡ろうとする人を見、しかも彼に危険を告げるだけの暇がないときには、彼の自由をなんら実際に侵害したことはないだろう。なぜなら、自由とは、人が欲することを行なうことの中に存するのであって、彼は川に落ちることを欲してはいないのだからである。しかしながら、危害が確実ではなく、その恐れがあるだけならば、彼にその危険を犯させるかもしれない動機が、どの程度十分のものなのかについて判断のくたしようがないのだから、こういう場合には、彼が子供でも精神錯乱者でもなく、また思考能力を十分に行使しえないほどの興奮状態や放心状態にいるのでないかぎり、彼にその危険を警告するだけにとどめるべきであって、彼が危険に身をさらすのを強制的にやめさせるべきではない、と私は思う。」(ミル『自由論』第5章)

# 死の自己決定

- ミルにとっても自由を一切放棄してしまう奴隷契約は無効→死の自己決定を認めるか？
- 危険の大きさと確実性

# 死を望むこと

- 死そのものを望むということはあるか？
  - たいていの場合には苦痛や苦悩からの解放のための手段にすぎない
  - 「自由とは、人が欲することを行なうことの中に存するのであって、彼は川に落ちることを欲してはいないのだからである。」
  - → 苦痛・苦悩の緩和をまず考えるのは当然

# 判断の歪み

- 当人の判断はどの程度アテになるか？
- 「当人の生活の価値は当人の判断による」は理想
- 批判的レベルでは、「当人の生活の価値は当人の判断による」は十分な情報と論理に照らして修正された判断によると解釈されるべき
- 情報不足やネガティブな情動・気分・性格が（特に現状や将来に対する）判断を歪める

# よくある判断の歪み

全部か無か／1か0か	過度な一般化
マイナス化思考／悪いことしか見えない	カタストロフィー思考
気分と事態の混同	過大視と過少視
「べし」思考	レッテル貼り
自己関連づけ	心の読みすぎ

# 幸福(well-being)研究

- 1990年代からの心理学の「革命」
- マーティン・セリグマン、エド・ディーナーなど。
- 「ポジティブ心理学」
  - ポジティブな主観的経験（幸福感、快感、満足感、充実感）
  - ポジティブな個人的特性（美德、才能、興味、価値観）
  - ポジティブな制度（家族、学校、共同体、社会）

# なにが幸福感・満足度に寄与するか

- 相関低い: 年齢、性別、学歴、社会階層、子供の有無、人種、知能、身体的魅力
- 中程度: 友人の数、結婚、宗教性、余暇の活動度、身体的健康、良心性、外向性、神経症的傾向(負の相関)、内的なコントロール感
- 強い: 感謝、楽観性、雇用、セックスの頻度、ポジティブ感情を経験する時間、一卵性双生児の幸福度、幸福度再テスト、自尊感情

# 楽観性とQOLへの介入

- 幸せ(主観的幸福度) = 個人のセットポイント + 生活環境 + 意志による活動
- 遺伝的要因はかなり強いが、さまざまな介入が可能。
- 認知療法、行動療法から得られている手法・知見
- 環境の改善
- 制度の改善

# 研究者のバイアスにも注意

- 「死の自己決定」を考える上でもこうした知見を利用する必要があるそう
- まだ研究を見たことはないが、生命倫理の研究者の認知バイアスのようなものも気になる
- われわれの一部は悲観的すぎるかも？
- われわれ研究者自身がまず楽観主義を身につけるべきかも

# 参考文献

- クリストファー・ピーターソン、『ポジティブサイコロジー』、春秋社、2010
- マーティン・セリグマン『オプティミストはなぜ成功するか』講談社文庫、1994
- マーティン・セリグマン『世界でひとつだけの幸せ』、アスペクト、2004
- 大石繁宏『幸せを科学する』、新曜社、2009
- Lopez & Snyder, *Oxford Handbook of Positive Psychology*, Oxford UP., 2009